（昭和46年7月30日発行　第三種郵便物認可）
第746号

本紙は女性による平和と平等を推進します

回覧 □□□□□□□

発行所
㈱全国婦人新聞社
〒160 本社　東京都新宿区西新宿3－7－28　宝幸西新宿ビル
電話 03（343）1846代表
振替口座　東京 172320
〒543 支社　大阪市天王寺区勝山2－14－6－8
電話 06（771）7415代表

全国婦人新聞

ご購読料
1年　4,200円
（郵送料とも）
現金・切手・振替で前納
（月3回発行）
10日・20日・30日

うすくちは心もち
控えめにお使いください
ヒガシマル醤油
うすくち
＊醸造元　兵庫県竜野市　ヒガシマル醤油株式会社

女性による老人問題シンポジウム

高齢化社会を支える教育と文化

「人生80年」へ展望

神奈川県婦人総合センター　会場あふれる熱気

敬老の日を控えた、九月八日、九日の両日、神奈川県・江の島にある、神奈川県立婦人総合センター（金森トシエ館長）で、「女性による老人問題シンポジウム　フェスティバル・女性がつくる老後の文化」が、「高齢化社会をよくする女性の会」（樋口恵子代表）と、同センターの共催で行われた。

同会のシンポジウムは今年で三回目を迎えるが、ことしはフェスティバルの名の通り、老人問題、高齢化社会に関する〝文化祭〟といった大がかりなもの。

シンポジウムのほか座談会、高齢化問題を考える分科会やミニ講演会、中高年向きのファッションショー、相談コーナー、ジャズダンスや、料理教室等々、盛り沢山の催しがくりひろげられた。〝入り〟の方も、高齢化問題に対する関心を物語るように、記録的な盛況。シンポジウムなど、五百の椅子席は一ぱい。〝立見〟の人が出る有様。二日間、センターは婦人たちで埋まった。（二面にも関連記事）

樋口恵子さん

黒井千次さん

第一日目のメーン行事は、シンポジウム「高齢化社会を支える教育と文化」作家の黒井千次さん、評論家の俵萠子さん、神奈川県知事の長洲一二さんという異色のパネラーに、評論家の樋口恵子さんがコーディネーターとなって進められた。

ホール内は満席で、通路に座っての参加。それでも入り切れず、ロビーやレッスン室でビデオ中継をしたが、ここもたくさんの人で埋った。

冒頭、樋口さんは「二十一世紀になって、高齢化社会による変化が、顕著に表われ、明治維新に匹敵するものになるだろう。人生五十年が八十年になり、親子三世代から四世代になっていくと、子どもを育てるだけが親の役割ではなくなり、親子が大人同士として向かい合う時代が長くなるという、構造的変化を伴ったものになる。その初代として、高齢化社会に新しい文化を築き上げていかなければならない。

こうした意識をつくっていく教育の世界でも、高齢化社会の変化に対応した新しい教育をどのようにするか考えられるかというと、まだ不足だ。高齢者が増えた社会にふさわしい文化というのは、日本人が昔から人生五十年と言っていたものを根底から変えていくのかも知れないし、高齢化社会で圧倒的な比率を占める女性の方が、その役割を担っていかなくてはならないだろう」と問題提起した。

自らに目標を課して

各パネラーからは、高齢化社会を支える教育の問題について提言があった。

黒井さんは、カルチャーセンターの創作教室で講師をした経験の中で、「私の幼年時代」をテーマにした文章を書いてもらったが、お年寄りの作品の方が印象にのこるものが多い、という。

「子どもの時の体験が、長い人生の中で、いろいろに形を変えてとぎすまされ、美しくなっているためではないだろうか。若い人より、年をとった人の方が、自分の中により豊かなものがある。それを、ただ書くのではなく、書きながら発見していく。年をとればとったほど、自分の中にあるものを確かめながら、そこから大切なものをつかみ出していくからだろう」と語る。

また、高齢者事業団に、仕事を依頼した時のことにも触れ、若い人の仕事とは異なることを指摘する。

「若い人は、スピードや効率ばかりを追求するが、自分の仕事が老成されていくというのは、すばらしいことではないかと思う。若い人の労働にはないもの――仕事を通して、これまでの人生を総括していくことができるのではないか」と結んだ。

続いて、俵さんは、今の学校教育について「与えられたものをテキパキとこなし、それが偏差値となって表われ、そのほかは退化していくような教育となっている。もっと、ミニマムの国民として、どういう教育をするかを議論してもらいたい」と述べ、「間接的に自己保存をするための知識にしても、受験用のものばかり。自分の身の周りのことをするための、直接的な自己の成長に必要な知識に至っては、男性は全く白紙。これを変えていかなければ、高齢化社会に対応する学校教育にならないのではないか。家庭教育にしても今の状態では耐えられないのではないか。若い人や子どもたちがお年寄りに深く身近に接する機会が少なくなっている」と問題点をあげた。

俵さんは、自分の父親と暮らし、その晩年を見て、人間がどのように年老い、どのように生き、死が、どういう意味を持つかを教えられた気がする、という。

「今の子どもたちは、近くで年よりを見ることが、少なくなり、声をかけることが減っている。地域社会の中で、何とか年をとった人の生き方、考え方に接しられる機会を、工夫してつくってもらえないだろうか」と提案した。

樋口さんは、自らに目標を課して、余力を生かせる知識、個性を生かして生きていくことのできる力を持たなければ、非行少年ならぬ、〝非行老人〟の激増という事態になるのでは、と危惧する。

これを避けるためにも、これからの教育には、ミニマムの部分が必要、というわけだ。

長洲さんは「表情豊かな土地に表情豊かな人たちがいる世の中になればいい。しかし、これには、パワーがいる。多彩な生き方を支えるのは草の根だ。日本人が、この豊かさをどれだけ人間らしくしていくかだ」

また、高齢化社会については、老人も、表情豊かに、そして老年を人生の終わりでなく、人生の完成期と考え、どのように生きていくかが問題だし、そのために勉強もしなければならないだろうと語った。

富・力・効率の原理排して

平等・参加・連帯を

俵　萠子さん

長洲一二さん

高齢化社会と文化についての提言では、俵さんが「日本の社会は、登り坂の文化で、下り坂の文化はなかった。人生五十年だったから、当然かも知れないが、人生八十年の時代を迎え、追いつけ追い越せが終ったあとどのような目標、決着をつけていくか。老年になって、美しさ若さを保つのも結構だが、若さから、解放され、気楽にいきたい」と、口火を切って発言。

黒井さんは「親というものは、場所柄を考えて、面とむかっていろいろ言うが、年寄りになると直接の責任がないので、一種のゆとりをもって接している。子どものころ、それを不思議がったり驚いたりした。これを大人になった時思い出すと、その時のさまざまなことがわき上がってくるもの。自分に孫ができた時、うんと悪いことを教えてやろうと思う、これでバランスをとっていきたい」と語る。

長洲さんはは「この世の支配的原理は、富と力と効率になっている。これが行きつくところが核兵器になる。この原理がすぐになくなるとは思えないが、平等・参加・連帯の原理でいきたい。富・力・効率は、画一的になって序列をつくってしまう。もっと、多様さを持つように」と語った。

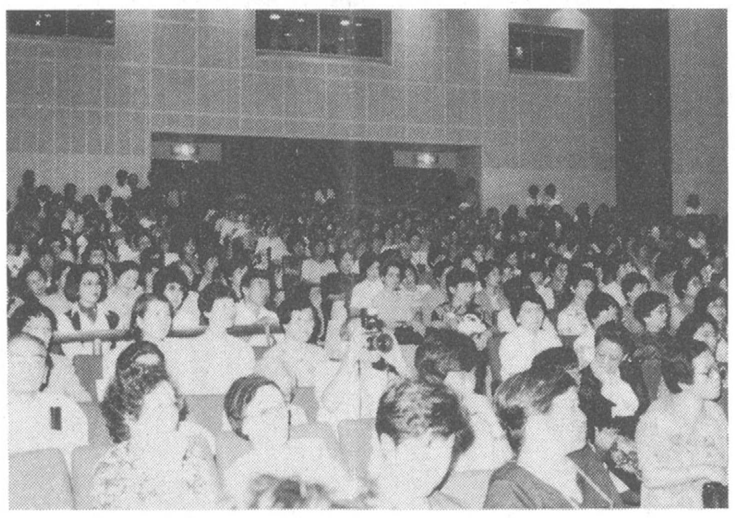
会場からは、「若い人の手助けになる年寄りになろう、世の中の役に立つ老人になろう」「心の豊かさと若い人への思いやりを持っているのが老いの美しさ。人間的な教育をするために美しく老いる必要がある」などの発言が相次いだ。

また、「この社会は男女平々。亭主の協力を得なければならないが、どう教育したらいいのか」との質問も出た。

黒井さんは「男はそんなに簡単に変わらない」。

俵さんは「今さら、亭主をかえるのは無理。それよりも、息子や孫の世代に期待をかけましょう」と答える。

樋口さんも「女性の力だけでは高齢化社会を変えることはできない。でも、老いの現実に気づいたのは女性。女性から文化を変えていきたい」と述べ、しめくくった。



シンポジウム（壇上は左から樋口、黒井、俵、長洲の諸氏）につめかけた会場いっぱいの参加者（下）

忙中歓

いつまでも美しくヘルシーに

ファッション、料理、ジャズダンス

八、九の両日、センターでは〝フェスティバル〟らしく、こうしたカタい勉強の場には珍しい、ファッションや料理教室、ジャズダンスなど楽しい催しがくりひろげられた。

○…八日の午後は中高年女性のためのファッションショーが行われた。

モデルは、樋口恵子、俵萠子、五代利矢子、金森トシエさんら、高齢化社会をよくする女性の会の錚々たるメンバーだ。

着やすい素材、着やすいデザイン。キュロット・スカートで足をあげてみたり、ポーズをとったり……。

多少、カッコウのオトロエタ？中高年女性向けのゆったりして、しかもキリッと見える洋服を着こみ、一生に一度のモデル業？とあって、ノリにノッテの大熱演。〝オバアサン〟にサヨウナラ、とはりきった。

○…料理教室は、一日目は「高齢者のためのやさしくできるヘルシー料理」、二日目は「若さを保つメニューづくり」。若さを保つには塩分控え目、メニューはあっさり。参加者は、作る方も、食べる方も熱心でした！

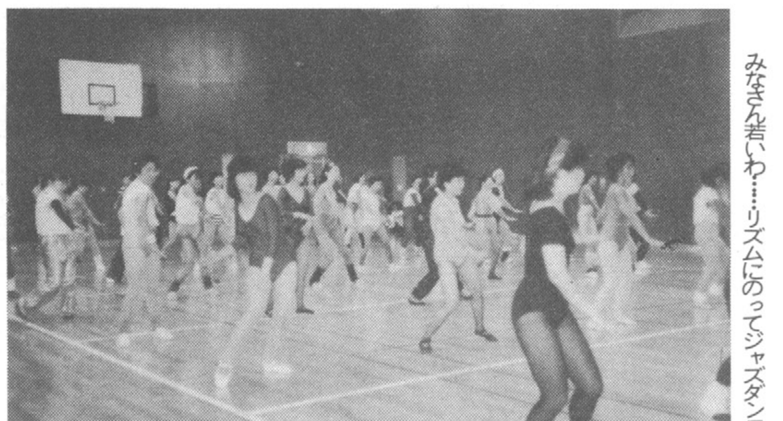
体育館ではジャズダンスがまっ盛り。老いも〝少し若き〟も参加して運動不足を解消。悩ましいピンクのレオタード姿も登場して……。

翌日、関節の足腰がどうなったかは……ヒミツ。

おしゃれコーナー
いつまでも美しく!!
Don't Forget Woman

樋口さんや俵さんもモデルとなって……ファッションショー

料理教室では作るのも、食べるのも大活躍しました



みなさん若いわ……リズムにのってジャズダンス

主婦議員

西山正子　かけ出し市議奮戦記　㉞

新風吹き込むか

二人進出「がんばらにゃ…」

開票日の翌日の四月二十六日の各新聞には、『主婦さわやか　手づくり選挙　子連れ手弁当で応援　茅ケ崎の西山さん』『新風吹き込みたい』『初出馬で三位当選　茅ケ崎の主婦市議』『祝賀会も「手づくり」茅ケ崎市議選　西山正子さん』『女性パワーが爆発茅ケ崎の西山さん』など見出しはいろいろだが、私たちのことが紹介されていた。祝賀会でみんなに取り囲まれてジュースで乾杯している写真も出ていた。

どうしてこのように大きく取り扱われたかというと、高得票だったこと、新人だったこと、無党派だったこと、主婦だったこと等があげられる。

選挙前に各新聞社から候補者の経歴とか職業を問い合わせてきた時、「主婦です」と答えたら、「主婦じゃなくて何か他の役がありませんか？　PTA役員とか団体役員とか婦人団体代表とか……」「今は、PTAの委員は引き受けていないし、いろいろな団体には入ってますが、団体役員って言ったらその団体からお金もらってるように聞こえるし、母親クラブ連絡協議会の代表をやっていますが、それを基盤に出るわけではないし、主婦でけっこうですが……」「そうですかねエ」と納得しない様子。ある新聞社は、「うちでは主婦は職業と認めておりません」。

確かに主婦というのは職業ではなく身分というべきだろう。「じゃあ無職でいいですよ」「無職ねェ」新聞記者たちは、主婦では肩書として弱いと考えているのではあるまいか。

しかし、当選すれば、主婦議員とか主婦市議とか書きたがるものなのだ。母親クラブを基盤として、と書いた新聞社もあり、「なかまの会」は、もっと広範囲の女性たちに支えられているのに、とはがゆい思いをした仲間たちも多かったに違いない。

四月二十七日付の神奈川新聞の『無風と過熱　83統一地方選挙を振り返る』の記事の中に、◆気を吐く婦人層◆として『特に、茅ケ崎、藤沢市議選では、「無党派」に徹した主婦二人が、既成政党にあき足りない婦人層の力を結集して、上位当選している。脱政党現象がジワジワと婦人層を中心に広がっていることの証明ともいえそうだが、〝浮動票〟とみられがちな主婦層の一角に、こうした新しい政治を求める動きが出てきたのは注目される。』とあった。

主婦二人とは、藤沢の柳谷さんと茅ケ崎の私のことである。柳谷さんは、数年前は茅ケ崎に住んでいて、市民学習グループ「公民館について勉強する会」の学習会にも顔を出してくれたりしていたので、よく知っていた。彼女が藤沢の市議選に出ると聞いた時は、びっくりもし、心強くも思った。選挙の前も、落ち込むと電話をし合い、励まし合ってきた。二人とも当選を果たしたのだから、お互いに頑張らねば、と思う。

さて、ある時、議会の場の討論で「私が主婦の立場から……」と意見を述べると、「議員としての立場ではどうなんだ？」と反論してきた。主婦と議員は別のものなのかしら。

小出川のみなもと（茅ケ崎の東北端・藤沢市との境）

（カットは松井俊雄さん）

婦人手帳

★★★小雨の降る日曜日、平塚市の市民プラザで行われている神奈川県腎友会の「手をつなぐ作品展」をのぞいてみた。一度見てほしいといわれていたのだが、平塚まではなかなか足を伸ばせない。思い切って休みの日に行ってみたのだが、来てみてよかったと思った。作品のうまい下手ではなく〝意気〟というか、〝生命感〟というか、ずっしりと響いてくるものがあるのだ。

★★★腎友会というのは腎障害者の団体だ。ほとんどの人が週三回、一回五時間ずつの血液透析治療を受けている。めんどうだからといって一回でもサボれば生命を維持できない。十数年前、透析は健保もきかず、莫大な治療費を工面できなければ死ぬしかなかった。四十一年に健保適用、四十七年身体障害福祉法に腎障害が加えられ、安心して治療や生活が出来るようになったのだそうだ。腎障害者は、全国に五万人。

★★★〝患者〟ではなく、障害者として生きよう、ハンディをもちながら、生きがいと自主性をもって生きたい、と就労運動をし、腎障害者とは何かを、世に訴えている。この作品展も、その活動の一環なのだ。

★★★この作品展の出品は、絵でも写真でも、手芸あるいは陶器、なんでもよいのだが、やはり手芸品が多く目につく。手芸品は、どうしても女名前が多い。出品者の三分の二以上を占める女名前をみながら、ふとある腎障害者が「腎友会の古いメンバーは男が圧倒的に多いんですよ」といったのを思い出した。自費で治療するしかなかったころ、男なら田畑、屋敷を売り払っても治療を受けさせても、女は……ということになる。女は死ぬしかなかった……というのだ。この話は、社会福祉とは何かということを如実に物語っている。

★★★ハンディを持った人が、ようやく人並みに暮らせるようになったかどうか……というのがいま。これから、という時に〝見直し〟の声が高まっているのは、まことに怖い。

筑摩書房
松下竜一著
憶（おも）ひ続けむ
松下竜一
―戦地に果てし子らよ
◉感動の書下しノンフィクション！
子を亡くした母の胸底には、涙の壺がある。その悲しみは、母から娘へとうけつがれ、いま、箕面忠魂碑訴訟の運動をうみ出していった。
1200円
砦に拠る　1400円
五分の虫、一寸の魂　980円
檜の山のうたびと　1500円
海を守るたたかい　1200円
〒101　東京神田小川町2-8　☎03（291）7651

教室のさびしい貴族たち
松本キミ子
定価2200円
さすらいの美術教師に「絵をかく心」と「人間の尊厳」を教えた少年たち。豊かな感性をもつ故に差別されてきた少年たち。彼らとの出会を通して生きて学ぶことの喜びを謳いあげた感動の記録。
絵のかけない子は私の教師
松本キミ子・堀江晴美著　定価2600円
誰も教えてくれなかった技術。愛すること、生きることのすばらしさを発見する描き方。真実のみが伝え得るこの感動。絶讃4刷出来
仮説社　101 東京都千代田区西神田2－7－8
☎（03）234－1779　振替東京5－187851

●親子がいきいきと育ちあうために
生きる力をのばす子育て
武田京子著
★新刊発売
いま子どもたちは本当に育っているのか。そもそも子育てとは何か。その目的とは？　子どもたちの現状と子育てのゆがみの原因を曇りのない眼でとらえながら、五つの自立と共生にもとづくゆたかな〝子育ち〟〝子育て〟を、自らの子育て体験をもとに心から呼びかける。　1200円
●好評増刷発売中
親子で家庭をどう育てるか　天野寛子著
主婦からの自立　武田京子著
父親の自立と子育て　木村栄著
各1200円
汐文社　東京都文京区本郷1－26－10
TEL. 03－815－8421～4

学陽書房
営業（電）03－261－1111
思いやりの歳時記
こくぶんひろこ著／思いやりでつづる四季折々の女の暮らし……幸福のくしゃみ／女の子の五月五日／抑煙権をどうぞ／ゆかたの夏まつり／ほか　1200円
世界の女たちはいま
柴山恵美子編著／雇用における男女平等の促進は、先進工業諸国では不可避なものになっていることが、いまさらのようにわかる。（朝日新聞評）　1500円
まともな食べものガイド
鳥居ヤスコ・工藤和子・根本悦子編著／食べものはもちろん、お店からレストラン保育園まで、所在地・電話・料金・入手方法など全国情報2000件！　980円
本社／東京新宿区市谷薬王寺町26電341－9131
営業／東京千代田区富士見1－7－5振東7－84240

各紙絶賛
母と私
九津見房子との日々
大竹一燈子著
山代巴序文―九津見房子さんのこと　●四六判上製　1800円
宗教者、高田集蔵と社会主義者、九津見房子との間に生まれ、じっと母を見つめ続けた娘一燈子が綴る、昭和初期の冬の物語。
本紙8/30＝極限状況にある母と子の思いを描き、惻惻と胸迫る。
朝日新聞9/2＝みじめな回想も母思いの優しい心があふれ快い。
毎日新聞9/3＝稀有ともいえる体験をへながら、母の感情を測る。
東京新聞8/24＝家族とは、教育とはなど人間の営みを考えさす。
築地書館　〒104 東京都中央区築地2－10－12
☎03－542－3731　振替東京1－19057

シリーズ〈女・いま生きる〉
主婦―再出発への設計図
藤井治枝
子育て後をみのりのときにするために何をどう選択したらいいのか。主婦の現状と未来への設計図。
〔目次〕第一章　主婦たちはいま／第二章　主婦・再出発への設計図／第三章　女たちが歩んできた道／第四章　明日の家庭を拓く／第五章　座談会・主婦たちが未来を拓く
1200円〒250
女たちよ台所から世界を変えよう
あき子の会編
政党とは無縁。普通の主婦たちが暮らしの視点をみごとに生かして、女性候補者を上位当選させた〝ズッコケ〟選挙のおもしろ顛末記。
1600円〒250
京都山科局私書箱24　ミネルヴァ書房　振替京都2－8076

座談会「熟年に乾杯」
女性の老後・フェスティバル

座談会「熟年に乾杯」に出席した（左から）金森トシエ（司会）、青木雨彦、佐藤愛子、樋口恵子の諸氏

抵抗か自然体か　金森さん
老後教育が欠落　青木さん
娘と日々闘いよ　佐藤さん
男性もお覚悟を　樋口さん

女性による老人問題・フェスティバル二日目の九日は、座談会、ミニ講演会（五代利矢子、高原須美子氏）などが行われた。その一つ・座談会「熟年に乾杯」は、青木雨彦（コラムニスト）、佐藤愛子（作家）、樋口恵子（評論家）という論客揃いのメンバーが、金森トシエ館長の司会で、〃人生の味〃をじっくり語り合った。

「高齢化社会の問題に、やっと男が入れてもらって、胸がときめいている」という青木さん。「私の若い時に比べると男も随分変って来たが、二十年後には、さらにどうなっているかと思うと暗澹（たん）たる思いがする」という佐藤さん。「これからの男性は、女性と一緒に生きていく覚悟をしていただきたい」という樋口さん。個性ある三人が、忍びよる老いに向って揺れ動く中年の心中を披露する。

まず、司会の金森さんは一例として、小説家・幸田文さんをインタビューした時の印象を「着物は地味ですが、手を動かすたびに、ピンクの襦袢がチラチラのぞく。爪もピンクに染めていて、髪もピシッと決めていて、美しい方だなあと思ったと同時に、この方は老いをねじ伏せて、強く生きている方だと思いました。が、この強さは、誰にでも求められるべきものではないですね」と語り、老いに抵抗しながら生きていくのか、自然にまかせるか——「戦中派の言葉にするなら〃無駄な抵抗はやめよ〃か〃今からでも遅くない〃か、どちらの生き方をすべきか」と問いかけた。

抵抗と自然の間を揺れ動きながら模索しているのが本音というのは樋口さん。昨日のシンポジウム『高齢化社会を支える教育と文化』の中で、俵萠子さんが発言した「若さからの解放が楽しい」生き方にも魅力を感じるし、一方「老いというのは年齢を重ねるだけでなく、体力的、生理生にも衰えてくる。そうしたものにも耐え、なおかつ己を持して、きちんと生きている老年の人を見ると頭が下がり、一生懸命、老いと闘いながら生きたいとも思う」という。

樋口さんより、老いの心境に自分を一歩近づけている感のある佐藤さんは「困るのは、いつから〃おばあさん〃の気分になったらいいのか解らないことだ」という。

ある程度の年になると、「まだ若い」「もう年だ」という二つの思いが心の中で葛藤し始めるのは、昔も今も変わりないだろうが「昔は息子に嫁をもらい、孫ができると〃おばあちゃん〃と呼ばれ、環境や社会が自然に決めてくれた。今は核家族になり孫も近くにいないし、若づくりをしても、世間は何も言わない。不安定な感じ」だという。

「周囲が決めてくれた方が楽な面はあるが、私はイヤだ」と樋口さんは反論。昔の小説に五十の老姿が……と書かれているくだりを紹介し、「石川啄木の短歌に〃たはむれに母を背負ひて、そのあまり軽きに泣きて、三歩あゆまず〃とある。啄木の母親の年齢は、多分私くらいだと思う。では、私の娘がいまそれを詠んだらどうなるか〃たわむれに母を背負いて、そのあまり重きにつぶれ、三歩あゆまず〃になってしまう」に、会場はドッと笑いでわいた。昔の感覚で「中年をなべて老姿なぞと、簡単に言わせたくない」と樋口さんはいうのだ。

大家族制から核家族へ、平均寿命が約三十年伸びたことなど、めまぐるしい社会の変化の中にあって、高齢化社会に向って、どういう生き方をすればよいだろうか。

結論から言えば、中年になったので、さて、老年をどう生きるか考えましょうというのではなく、老年時代をいかに充実したものにするかは、若年時代の生き方から、すでに始まっているということだ。

その中で青木さんは「学校教育はおかしいと思う。老年になってからを考えた教育がなされていない」「個人としては、常に目的意識を持って学ぶことが大切」と、公と個の欠如した部分を指摘。佐藤さんは「子育てにそそぐ情熱の三分の一くらいは、自分の将来のために使うべきだ」と、若い母親たちに苦言と助言を呈した。

「熟年の課題の一つに、若者と、どうつき合うかもあると思う」と金森さん。

戦後、大人たちは、こうした若者に一歩も二歩も譲り、譲ることが理解を示すことだと思っている節もある。違いを正そうとしようものなら、水戸黄門の印籠のごとき切札〃時代が違う〃の言葉で片づけようとする。

「いつの時代でも変らないものがあるという言葉を逆に思いつきまして、わが家では〃時代が違う〃という言葉は禁句なんです」（青木さん）

「私なんかね、お前らはそうかも知れないが、私はこうなんだと押し通しますよ」という佐藤さん。娘とは日々闘いであり、若者と年寄りが何事も合わせてはいけないという。その佐藤さんのエピソードにこんなのがある。

風呂の仕度をするのは娘の役で、時々水を止めるのを忘れ、あふれさせてしまう。〃風呂の水も気がつかないでどうするか〃と常々怒っていた。「娘がいない時は自分でやるんですが、最近ボケて来ましてネ。ある日、自分が水をあふれさせてしまった。〃もったいない病〃を持つ我ら世代としては、一杯の水も捨てることができないので、洗濯をしようと思っている所に娘が帰って来た。この状況を娘に見せたら何と言われるか解らない。ままよと裸になって、水風呂にザンブと飛び込みましたヨ」。娘に対してもこれだけの意地と張りをもっているのだという。

「私も最近、物忘れするようになりましてネ、娘に〃ボケたボケた、気をつけナ〃など言われ、それに押され気味だったけど、最近は威張らせません」と樋口さん。

というのは、ポツポツと出て来たのが、特別養護老人ホームへの母娘の入所。ある母娘は、母親が九十歳で、寝たきりではあるが頭もしっかりしているのに、六十歳後半の娘はボケてしまっていた。母親が〃娘が意外に早くボケまして、母娘ともどもごやっかいになりまして、申し訳ございません〃と挨拶したのをみて「娘に対して勇気が出て来ましてネ〃これからは上二世代が老いていく時代だから、あんたも母親に、そう言わせないために、しっかり老いなさい〃」とタンカを切るという。

世代で考え方のギャップがあるのは当然のことだろう。金森さんは、司会者の立場から「若者の奇矯と思える行動も、時代の先ぶれ的なものがあるのだろう。その辺りを柔軟に処すのが、中年の知恵といえるのかも知れない」とまとめた。

子育てを終えた後、夫婦だけの生活が長くあることも、これからの夫婦の特長だ。女の立場からすると、夫を粗大ゴミにして、かかえ込まないために、夫とどうつき合えばいいのだろうか。

「日曜日など、夫が疲れてテレビの前でゴロンとしていると、妻の方は掃除機をもって〃どいてどいて〃という。夫の方は、三十～四十代の頃から、粗大ゴミとしての訓練が出来ているのではないでしょうか」（青木さん）

「ある主婦が、カルチャーセンターへ申し込んだところ、夫の方から、受付けてくれるなという電話があったそうです。理由は、妻に出て行かれると、自分が食事に困るということだそうです。週に一回のことですヨ」。このように、男が粗大ゴミになる要因には、老年になってから自分の身の回りの事が出来ないこと。退職後は人間関係が切れ、社会の中で孤立することなどを樋口さんはあげ、「男の人の人間関係の結び方は未熟だと思う。名刺と肩書で有無を言わせず命令することはできるが、名刺と肩書を抜いたら、妻すら説得できない。切迫すると殺してしまう。これだと男の人には気が許せないし、そんな未熟な人とつき合うの、家でも社会でもイヤですネ」という。

「新聞の人生相談に〃嫌い、醜い、つまらない男と、なぜ暮らさなければならないのか〃という相談に〃そんな男でも、男なしで暮らすよりまし〃とありましたがね」（青木さん）

「私には夫婦の問題を語る資格はない」という佐藤さんは、有吉佐和子さんが亡くなられたのを例に、体調が悪かった有吉さんに医者に行くよう家族は勧めていたが、老いた母親と娘では引っ張って行くことができなかった。「そんな時、どんな亭主でも男であれば、連れていくことができたと思う」。もし妻が、夫が、ボケた時〃おかしい〃と言ってくれることのできる身近な人が妻であり夫である。「若い時にはいらないけど、夫婦とは年老いて来てから必要になってくる。その時のために、歴史があるのだと実感します」としみじみ語る。

そういう夫婦の歴史を横暴という型で踏みにじった男性には、老後に、そのツケが回って来る。「妻の方には、長年のうらみつらみが、老いとともに複利計算で重なり、ドーッとふき出して来る。いま、それぞれの夫婦の在り方を考え直してみることが大切」という樋口さん。

「ともあれ、自分の人生は自分で決着をつける。辛い事だがそれに立ち向う勇気だけは持っていたい。人間として楽をしたいのは人情だが、それを乗り越えていくのが人間としての生き方だと分っている時、その苦しさを避けてはいけない」と、常に自分に言い聞かせているという言葉を紹介した。

最後に、佐藤さんは「自分にとっての自然」を探すことが大切。人が言うから、時代だからではなく、自分はこれが好きなんだという信念をもって生きることだ、と結んだ。

「守るも攻めるも……」の心情を、熟年の笑顔にかくして、参加者一同と「乾杯！」

三十五回にわたって連載したスパイスの各論。主だったものは、前回（九月十日号）でほぼ紹介が終りました。

今回からは、いよいよ実習編です。日頃手がけている身近な素材・料理にスパイスを生かします。

〃プロの味〃登龍門への導き手は、今まで「ワン・ポイント・アドバイス」を担当していただいた、ライオン家庭科学研究所のマコーミックスパイス教室講師の金子峰子さんです。またスパイスについてのワン・ポイント・アドバイスは、同主任研究員の武政三男さんにお願いします。

このシリーズを参考に、台所の片隅に眠っているスパイスたちを目覚めさせ、さらに、新しいスパイスを仲間に加えていただければ幸いです。

——編集部——

あじの香り蒸し

【材料】 あじ…中4尾▽塩…小さじ2▽ホワイトペパー…小さじ1/2▽フェネルシード（ホウル）…大さじ2/3▽オレガノ（ホウル）…大さじ2/3▽バジル（ホウル）…大さじ2/3▽白ワイン（酒でも可）…120cc▽サラダ油…適量▽レモン…1個▽アルミホイル…適量▽付け合わせ＝フライドポテト…適量▽ミニトマト…4個

【作り方】

①あじは、塩焼の要領で、ゼイゴ、ウロコ、エラを取り、内臓を出して、水洗いし、クッキングペーパーで水気を取る。

②あじの両面に、二～三カ所切り込みを入れ、火の通りをよくする。

③塩とホワイトペパーを混ぜ合わせ、全体に振り、腹の中にも振る。

④フェネルシード、オレガノ、バジルを混ぜ合わせ、四等分にし、あじの腹の中に詰め、20分位冷蔵庫に入れ、なじませる。

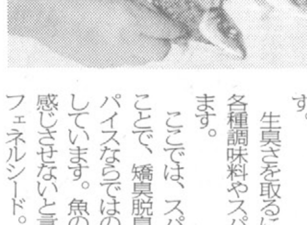
⑤オーブンを200度Cにあたためておく。

腹の中に振り込む
加熱したあとは取除く

⑥レモンは半分を縦くし形に、残りは薄い輪切りにしておく。

⑦アルミホイルを、あじが4尾入る程度のボックス型にし、内側にサラダ油を塗る。フタ用にもう一枚用意する。

⑧⑦のホイルを鉄板にのせ、あじの頭を左に並べる。


盛りつけた時、下になる側の腹、中央から背側に包丁を入れ、内臓を取り出す。腹の内側一面にスパイスを振り込む。

⑨あじの上に、レモンの薄切りを並べ、上からワインを振り、ホイルでフタをし、200度Cのオーブンで20分位蒸し焼きする。

⑩蒸し上ったら、スプーンで腹の中に詰めたスパイスを取り除く。

⑪皿に盛りつけ、フライドポテトとミニトマト、くし形レモンを添え、レモンを絞って食べる。

☆ヒント…オーブンの代わりに焼き網でもよい。最後に裏返し、表側も火にあてると良い。

魚をおいしく食べるには、何といっても新鮮なものを使うのが一番。この時は、生食しますが、ちょっと時間がたったのは加熱料理をします。

魚は、煮たり蒸したりした場合には、生臭みが残りやすく、特に、青魚が強いようです。

生臭さを取るには、牛乳や各種調味料やスパイスを使います。

ここでは、スパイスを使うことで、矯臭脱臭に加え、スパイスならではの香味を生かしています。魚の油っぽさを感じさせないと言われているフェネルシード。ハーブ系のスパイスで、ミートソースやピザなどのトマト料理に合うオレガノ、バジルをブレンドして使いました。

単品では扱いにくい香りも、ブレンドすることで使いやすくなるでしょう。

☆ワンポイントアドバイス☆

スパイスで魚の生臭みを取る時は、下ごしらえか、調理中に加えると効果的。特に、スパイスと一緒に加熱すると良い。調理後は、スパイス（ホウルの場合）を取り除いて、食べるのが美味しく食べるポイント。（資料提供・ライオン家庭科学研究所）

ほん

主婦——再出発への設計図
藤井　治枝著

総理府調査への疑問から
実態調べ〃未来へ目〃

主婦—再出発への設計図
藤井治枝
ミネルヴァ書房
AYUMU

これからの主婦のあり方を問い、再出発を説く本はかなり多く出ているが、この本は、実際の〃主婦の意識調査〃をベースにしているところが興味深い。

昨年の四月、総理府が発表した「婦人問題に関する国際比較調査」で、日本の主婦の七一％もが役割分担（夫は外、妻は家）を肯定した。この結果は他の国のどこよりも分業を肯定したものだった。筆者は、この結果にふと疑問を持つ。そして調べてみて、総理府の調査対象者は、中高年齢者にかたより、学歴は高等教育以上は一三・九％にすぎず、有職者は三〇％しかなく、いまの日本全体の婦人像を反映していないという事実に気づく。

そこで藤井さんは、横浜市の婦人グループに依頼、横浜の三～四十歳の婦人の意識調査をし、その回答をずっと働いてきた主婦、職業中断後パートとして復職した主婦、婦人問題の学習や地域活動に参加している主婦、趣味やスポーツを楽しんでいる主婦の四つに分け分類してみた。すると、この四つのグループで明確に意識の差があることがわかった。例えば役割分担に対しても、働き続けたグループは七一・九％が反対で総理府調査のスウェーデンとあまり変わらない。これに対し趣味・スポーツグループは賛成七七・三％、総理府調査にもっとも近い——。

この本は、こうした主婦の意識の実態から入り、問題を説き起して行く。そして、いま、〃期待されている〃（筆者は〃社会に〃と柔らかな表現だが、為政者？男社会？それにあやつられた世論？など、いろいろ読みとれる）のは専業主婦だが、現実の低経済成長は、専業主婦を少数派にしており、この大勢は変わらないだろう、ということをのべている。そして、単なる家計補助だけでなく、明るい未来へ向かって歩み出した主婦の姿を、実際の実例ルポや手記で描く。

最終章が、未来を拓くために努力している主婦の二つのグループ（池子の自然と子供を守る会＝神奈川県逗子。横浜・未来を拓くおんなの会）との座談会。一つは自らの生き方に疑問を感じたところから出発し（横浜）、一つは何とかしなくてはいけない状況が先にあり（池子）、という全くちがったタイプのグループだが、自ら考え、たくましく動き出した婦人たちの気もちがいきいきと出ており、興味深い。（ミネルヴァ書房・一、二〇〇円）

▼▼おしらせ▲▲

どうなったの？富士見事件
「裁かれない『医療』を問い直す」

富士見産婦人科病院事件が発覚してから四年。事件のさまざまな問題点を通して、医療を受ける側から日本の「医療」のあり方を考える。▽発言者＝板倉宏氏（日大法学部教授）、竹村泰子氏（衆議院議員）、高杉晋吾氏（医事ジャーナリスト）、前田弘氏（自治労）。

▽日時＝九月二十三日　午後一時三十分～五時。

▽場所＝所沢文化センター。

▽主催＝富士見産婦人科病院被害者同盟　(電)0429・26・8863（所沢市役所内）。

「職場のタバコ公害を考える」

喫煙の自由が、非喫煙者の人権を侵害している事を訴え、職場の安全衛生を考えようというもの。

主催・全国禁煙・嫌煙運動連絡協議会（問い合せ☎03・234・3843）

▽日時＝九月二十四日　午後一時三十分～四時。

▽場所＝家の光会館（新宿区市谷船河原町一一）国電・地下鉄東西線…飯田橋下車五分。

現代社会と育児放棄

日本女子社会教育会・家庭教育懇談会「現代社会と育児放棄問題」講師庄司順一氏＝都立母子保健院心理指導員。十月十三日午後一時　日本女子会館（地下鉄芝公園、または大門下車）。無料。

神奈川センター九月の日程

神奈川県立婦人総合センターでは九月中につぎのような講演会を開く。

◇「今・世界の女性たちは～デンマーク大使時代をかえりみて」高橋展子氏。9月26日後1時半。（問合わせ　生涯学習部）

◇「思春期のつまづき～女の子をもつお母さんのために」立教大学社会福祉研究所　西沢稔氏。9月29日後1時半。（問合わせ福祉部）

◇国際理解講座・海外リポートNOW▽29日「変わりゆくアラブ世界」成蹊大教授　牟田口義郎氏▽10月13日「スイスを語る」スイス大使館文化報道官ジャン・フランソワ・ゲリー氏▽10月20日「特派員のみた西ドイツ」NHK報道局　伴野文夫氏▽10月27日「日本人の知らないフィリピン」イピルイピル編集長　三好亜矢子氏。時間はいずれも一時半（問合わせ　生涯学習部）総合センターへ☎0466・27・2111へ。

第4回反差別映画祭

第四回・反差別映画祭　日本映画史にみる差別PARTⅡ依田義賢特集▽9月23日　江東区総合区民センター「山椒大夫」ほか◇24日　国分寺商工会館「荷車の歌」ほか◇30日　千代田公会堂「祇園の姉妹」ほか、対談・依田義賢、白井佳夫氏。時間はいずれも午後一時から。参加協力券千円。三回有効券千五百円。主催　反差別映画祭実行委員会。(電)03　844　5726）

……………

【訂正】 九月十日号　銃後史ノート〃女たちの8・15〃を考える記事中、市川房枝さんらが戦後すぐに作った「新日本婦人の会」というのは「戦後対策婦人委員会」のまちがいにつき、訂正いたします。

TOSHIBA

毎日、毎日
顔を合わせるものだからこそ
自分の感性にピッタリくるものを選びたい。
洗練された都市の空気を
呼吸している女性に
いま、ちょっと知的でセンシティブな輝きの
クックモアがよく似合う。
ひと味ちがうおいしさづくりの
アイデアと使いやすさ
そんな東芝の技術が息づいている
本物志向の新シリーズ
"クックモアシルキーホワイト・パール"

FOR BETTER LIFE　上手に使って上手に節電

東芝調理器具シリーズ
クックモア

いま、白いパールがキッチンに輝きますね
新しいアーバン感覚のクックモア

新登場
アーバン感覚の
Cook More Silkywhite・Pearl

●東芝調理器具シリーズクックモアには保証書がついています。お買い求めの販売店で所定事項を記入した保証書を必ずお受け取りください。

東芝電子保温釜　マイコンかまど炊き風
RCK-10AMT(PW)1.0ℓ炊き(約1～5.5合)　24,800円(510W平均保温24W)
RCK-15AMT(PW)1.5ℓ炊き(約2～8合)　25,800円(600W平均保温25W)
RCK-20AMT(PW)2.0ℓ炊き(約2合～1升1合)　27,300円(650W平均保温26W)
東芝ホットプレート　プラズマ12
HGT-185(PW)　16,800円(1.2kw)
東芝電気保温ポット
PLK-650(PW)2.2ℓ　14,000円(湯沸し750W 保温50W)
東芝オーブントースター　ハイスピード8
HTR-850A(W)　15,000円(890W)
東芝電磁調理器　クックスター
MR-120(W)　44,800円(1.2kw)
東芝コーヒーメーカー　ミル&ドリップ
HCD-523M(W)1～5カップ用　15,800円(650W)
東芝オーブングリルレンジ　アラカルト
ER-800J　150,000円(アース・電気工事費別)

先端技術をくらしの中に…E&Eの東芝